

ハヤセソ 病図書館蔵書
No. DD 343
DD 344

新 生

平成三年三月十日印刷
平成三年二月二十日発行



新生第四十三卷第一号

財 団 法 人
東 北 新 生 園 慰 安 会



新生・第四十三卷第一号……目次

表紙写真……シベリアに帰ろうか 佐藤(好)撮

近代に於ける宮城県の

ハンセン病について

真山 旭……………(2)

介護員研修会に参加して

守屋 恵子……………(11)

介護員研修会に出席して

佐藤 節子……………(12)

一九九〇年 駄想

和田 修光……………(14)

詩

高橋たか子選……………(15)

短歌

扇畑 忠雄選……………(18)

俳句

八木澤 高原選……………(20)

川柳

ちば東北子選……………(21)

新春文芸

随筆……………子守り日記

秋山 篤選……………(23)

詩

高橋たか子選……………(27)

短歌

扇畑 忠雄選……………(30)

俳句

八木澤 高原選……………(31)

川柳

ちば東北子選……………(31)

園内日誌・謝寄贈図書欄

……………(表3)

あとがき……………(表3)

平成二年度新生賞・努力賞受賞

東北新生園文芸協会

◇新生賞◇ (各文芸選者推薦)

文章の部 佐々木 三玉

「明清爺さんのこと」

詩の部 山田 一歩

「邂逅の喜び」

短歌の部 松崎 つね

盲導柵の切れ目を曲る帰路さえも

見えず迷いし日を思うなり

俳句の部 太田 司老

正座して明治生れや暑に耐ゆる

川柳の部 桜山 南仙

石ころのどれも佛になれる顔

◇努力賞◇ (文芸協会推薦)

文章の部 鈴木 磐井

詩の部 江崎 深雪

短歌の部 佐藤 つや子

俳句の部 鈴木 磐井
川柳の部 石川 蝶一

東北新生園患者自治会 (楓会)

新役員紹介

(平成三年二月一日付)

会長 久保 瑛二
副会長兼福祉担当 一條 道治

常任執行委員

庶務兼会計担当 牧 実
生活担当 斉 藤 文夫
作業担当 山 田 一歩
事業担当 藤 田 芳夫
文化担当 山 野 辺 登
渉外担当 佐々木 三玉
非常任執行委員
庶務兼文化担当 小 山 昇
会計兼作業担当 新 城 栄治郎
福祉兼生活担当 北 上 文夫
事業兼渉外担当 鈴 木 磐井

近代に於ける宮城県の

ハンセン病について

——退職記念論文——

東北新生園長 真山 旭

(記録史のため、らいとハンセン病の語を併用せざるを得なかつた。ご了承いただきたい。)

一、太平洋戦争(第二次世界大戦)

終了までの状況

明治四十(一九〇七)年三月、法律十一号(いわゆる、らい予防法。しかし、この名称はついていない。全文十二条)により、ハンセン病患者の届出制と、使用物件の消毒廃棄、入所費の自弁、道府県連合立らい療養所の設置などが決定された。これにより全国を五区に分けて、北海道と東北六県を第二区とし、青森県油川村(後に新城村へ移転。現青森市)に、収容定床一〇〇の北部保養院(現在の国立療養所松丘保

養園)が、明治四十二年四月に開設された。

その経費予算は、毎年道・六県警察部長と衛生課長が会合して、分担額を決定することとなっており、たとえば、昭和九年度は総予算一、二二三、三六一円中、宮城県分は二〇、一一一円であつた。

大正八年の第三回全国ハンセン病患者調査により、総数一六、二六一名。うち、一、三四〇名収容であることが判明した。内務省衛生調査会第四部は、大正九年に公立五か所のらい療養所の拡張と、国立らい療養所の新設を計画したが、後者の最初の施設として収容定床四〇〇の長島愛生園が設立されたのは、昭和五年であつた。

昭和六(一九三一)年八月に法改正が行われ、十二条からなる新しいらい予防法が公布されたが、当時の医学事情とは

いえ、患者の特定職業への従事禁止、使用物件の消毒廃棄、強制収容などが内容であった。

昭和八年には、入所費用が無償となったため、ハンセン病者の送致をためらっていた市町村も、収容対象を拡大化したため、既存らい療養所は定員を超過して収容することとなり、運営に大きな問題をひきおこすこととなった。

昭和六年には、昭和天皇の母君であられる貞明皇后様が、ハンセン病患者の救済として、内務大臣に十万円のご下賜金のご沙汰があり、これを元として政府はハンセン病対策に本格的に取り組むことになり、同年財団法人らい予防協会を設立した。これは、後年に藤楓協会へ発展することとなる。

貞明皇后様には、昭和七年に「らい病者を慰めて」の大宮御所の御歌会の御題に、

つれづれの友となりても慰めよ

行くことかたきわれに代りて

の御歌を詠ぜられ、朝野の人々すべてに、大いなる感動を与えられた。

大正十三年から群馬県草津町で、私立鈴蘭園を経営して、ハンセン病者に医療の手を差し伸べていた三上千代（山形県出身・沖繩愛楽園婦長として沖繩戦中入園者を守り、後に多磨全生園へ転任。昭和三十二年ナイチンゲール賞）は、昭和六年十一月に秋保村（現仙台市太白区秋保町）に、第二鈴蘭園とらひ相談所を設けた。翌七年二月には、仙台市長町（現太白区）にハンセン病者の子弟のために、保育所を開設した。

これらは、第一区の東京多磨全生病院（現国立療養所多磨全生園）と、第二区の北部療養院の中間に、国立らい療養所の新設を願うてのことといわれ、後に東北新生園設立の根源ともなったもので、その卓見には驚かざるをえない。

大正十一年に青森県衛生課長（中條資俊院長の海外出張中、同年北部療養院長事務取扱）より、宮城県へ転出してきた浅海修藏衛生課長は、昭和八年に土田哲太郎衛生技師、東北帝大医学部皮膚科の太田正雄教授とともに、当時の内務省による全国ハンセン病患者調査数が、実際よりも低く多数の在宅患者が見逃がされているのではないかと考え、らい集落とされる県下の十六町村で一、四二七名を調査した。その結果、三〇名とされていた届出のほか、三六名の新患を検出した。この調査は、警察権力を背景としたものとはいえ、本邦で最初にして最大規模、綿密をきわめたもので、農村家族内、特に親子間の長期、濃厚、反覆の接触による発症であることを明らかにし、それ以後の十数年間は、ハンセン病疫学研究の基本とされてきた。

昭和十二年九月に、三井財閥は、三千万円（現在の約二十億円）を投じて、財団三井報恩会を設立して、癌、結核、ハンセン病の医療施設に重点助成をすることとした。これは昭和七年三月に、東京日本橋三井銀行本店前で、理事長の団琢磨男爵が血盟団と称する右翼の男にピストルで射殺されたことによる。当時円売りドル買いで、膨大な利益を得て国内インフレ、物価狂乱、小作と労働争議の社会不安の原因をなし

た財閥、とくに三井に対する強い反感によるものとされ、この事件が三井の社会に対する態度を修正させたためである。

財団からハンセン病床三、〇〇〇の多額（二七〇万円）の寄附を受けた政府は、内務省に国立らい療養所建設委員会を設置し、当時の六、六〇〇名収容を拡大して一万床とすべく、三カ年計画で既設の五カ所の公立、三カ所の国立（長島・栗生・星塚）の拡充と、更に国立の新設により三、〇〇〇床増を決定した。

収容定床四〇〇の東北新生園は、この計画によるものであるが、昭和十年と十一年の中條北部保養院長の建議や、昭和十年の保養院管理者であった山村光政青森県知事の、内務大臣あて上申が強く働いたともいわれる。当時は東北地方の災害が続き、また、第二区担当の保養院の拡張が、定床二一〇から五〇〇に増床した直後でもあったので、再度の増床が保養院で不可能だったことにもよる。

昭和十二年九月に、敷地が登米郡新田村（現迫町新田）に決定買収され、昭和十四年十月に保養院長鈴木立春が園長に着任し開園した。その後も、三井報恩会から二〇〇〇床分の追加寄附を受け、昭和十六年八月に収容定床六〇〇となり、同年末に五九〇名、同十八年には六二四名を収容した。東北新生園が三井より受けた寄附は、合計約七二万円であった。

ハンセン病は、昭和初期から終戦を経て、昭和三十年頃までは、宮城県の衛生行政の主軸の一つであり、急性伝染病、結核、寄生虫、トラコーマ、性病とならぶ存在であった。

表 1 全国と宮城県（本籍）のハンセン病患者数 (1)

調査年	全国総数	入所中	県在宅	備考
明治 33	30,359		628	
大正 8	16,261	(1,161) 1,555	259	北部保養院定床100 (1)
昭和 5	14,663	3,272	160	〃 210 (11)
〃 10	15,193	5,265	177	〃 500 (66)
〃 15	15,796	9,192 (本57+7)		新生園 450(129)

※ 備考の () 内は県出身者数。+昭和15年新生園開設時に全国で入所中の県出身者数。

大正8年の入所者は1,161名との二説あり。

主管は警察部で、駐在巡查が容疑患者を認知し、県衛生課に連絡して、診定のため課員が患者を訪問し、入所・予防措置を指示するという方式であった。

一度、ハンセン病と診断されると、排菌の有無、本人の意志や家庭の事情にかかわらず療養所に貨車を借りきつての護送となり、消毒は嚴重を極めた。そのため、入所直前に自殺したり逃亡する事例も少なくなく、患者家庭の崩壊を生ずることもしばしばで、担当者や患者本人の苦しみも、絶大なものがあつた。

しかし、患者が入所しても、当時のハンセン病に対する特效治療はなにもなく、大風子油の筋肉注射や内服が主たるものであり、収容後間もなく、らい腫性喉頭狭窄による窒息や、院内感染による肺結核、腎炎、丹毒などによる死亡が続出す悲惨な状況であつた。

松丘保養園の記録によると、明治四十二年の開設から昭和三十四年までの五十年間に、収容二、九二二名(宮城一七三)中、逃亡七七九名(宮城七一)となつており、東北新生園では、昭和十四年の開園から昭和二十年まで四十六名、昭和二十一年から二十九年まで一〇六名、昭和三十年、三十一年に一名づつの逃亡記録がある。これらは鉄鎖なき囚人といわれた当時の入園者の状況を物語るものといえよう。

一方、緊迫した戦時下の昭和十六年七月には、国立と公立のらい療養所の統一化と、格差解消を計つて、沖縄県立二カ所を含む公立七カ所は、すべて国立に移管されて、全国の国

立らい療養所は計十一カ所となつた(奄美、駿河は未だ設立されてない)。

時流は、日中戦争の泥沼から、国家の総力を挙げて、太平洋戦争(第二次世界大戦)に突入することになる。

二、戦後から現在までの状況

敗戦とともに占領下におかれた時代は、昭和二十六年一月のサンフランシスコ対日平和条約調印まで、物心ともに荒廃し虚脱状態にあつた。しかし、本邦のハンセン病医療と行政にとつて、一大転機を迎えることになつた新時代であつた。

太平洋戦争の始つた昭和十六年(一九四一年)、アメリカ南部のカービルにあるハンセン病院の院長フアージーは、それまで結核治療に開発され、無効として放置されていたサルフォン剤のプロミンを同じ抗酸菌病であるハンセン病の治療に試みたところ、ハンセン菌の感染性を急速に低下させ、菌そのものも数年で体内から消滅させることを確認でき、その結果をアメリカ医学誌の戦時特別号に発表した。

我が国でその事を知つたのは、占領軍医のもたらした医学誌であつた。これまで不治という暗黒下のハンセン病が、化学療法により、比較的短期間に軽快治癒するとの報は、敗戦で虚脱状態にあつた我が国のハンセン病研究者や、臨床家に一大衝撃を与えた。

しかし、本邦でプロミンの開発と静注による試験的治療が

試みられたのは、昭和二十二年末のことで、ハンセン病者もこれまでの経験から、新治療薬の被検者になることに、非常な抵抗を示した。ところが、全身性のらい腫やらい腫性浸潤が吸収消失し、らい性鼻閉や喉頭狭窄などが、数カ月で消褪するという奇跡的著効を眼の前にした患者は、数少いプロミンの治験例に参加を切望したが、当時のプロミンの絶対量は僅少であった。

一日も早くハンセン病の苦しみから逃れようとした患者は、プロミンの予算獲得に闘争委員会を結成し、血書して厚生省に要請したのは、試験的治療開始後半年のことである。プロミンがハンセン病化学薬剤として、現実に予算化されたのは、昭和二十四年四月であり、それ以後わが国のハンセン病は、輝やかしい化学療法の到来を迎えて、治癒する時代となったのである。

その後、昭和二十四年から使用されたダブソン（プロミンの化学構造母体）が、経口投与可能で薬効もプロミンを凌ぐこと、極めて製造費が安いことから、プロミンに代ってダブソンが昭和五十年頃までハンセン病治療の主力をなしていた。ここで表1に続き、戦後から現在までの全国と、宮城県に本籍を有するハンセン病者数の年次推移を、表2（参照）で示した。一方、我が国におけるハンセン病新患者発生数を、全国と宮城県でみると表3（参照）のようになる。

新患者発生は、昭和二十六年頃までは、全国で毎年六〇〇〜八〇〇名であったが、昭和二十七年から三十四年にかけては、

表2 全国と宮城県(本籍)のハンセン病者数 (2)

調査年	全国総計	入所中	県出身者	県在宅
昭和 25	12,626	10,100	568	69
〃 35	12,899	10,645	189	18
〃 45	11,433	8,958	155	13
〃 55	9,458	8,509	143	14
〃 59	8,706	7,801	133	5
〃 63	7,744	6,976	107	2

※昭和25～45年は沖縄を含まず。

毎年三〇〇〜四〇〇名と半減し、昭和三十五年から三十七年には二〇〇〜三〇〇名に、昭和三十八年から四十二年には一〇〇〜二〇〇名と漸減し、昭和四十三年からは、年間発生は一〇〇名以下となり、昭和五十四年以降は五〇名を割り、最近は遂に二〇人台となっている。

しかし表3からも見られるように、終戦直後の五年間に於ける新患者の増加により、昭和二十五年に厚生省医療機関整備中央審議会は、ハンセン病床を既定の二千増に五千床を追加して、総計一万七千床にすることにした。これは、全て既存の療養所の増床で充當することとした。東北新生園の収容定床の変遷を表4（参照）に示したが、最も収容者数が多かったのは、昭和三十四年の六二八名で、宮城県に本籍のあった者は一一五名で

表3 全国と宮城県(本籍)のハンセン病新患者数

昭和	22	25	30	35	40	45	50	55	60	63	平成 元年
全国	607	604	331	257	125	46	83	37	42	33	26
県	3	13	0	0	0	0	0	1	0	0	0

昭和22～45年は沖繩を含まず。

あった。

昭和二十年代のハンセン病患者の人権回復の第一歩は、終戦直後の昭和二十年十月で、公職選挙権と被選挙権が療養所入所者に認められたことであった。昭和二十二年には従来の小学校の外に、六三三制による中学校の併置が療養所内に義務づけられた。また、入園者の作業に対する予算化も認められ、昭和二十三年からは慰安金も国庫支出となった。昭和二十六年には全国ハンセン病患者協議会（全患協）も発足して、社会における偏見除去と、患者の基本的な人権擁護に当ることになった。

以前よりハンセン病患者のために、深く御心をいためておられた貞明皇后様には、昭和二十六年五月に御崩御になられたが、翌年お子様の昭和天皇と秩父、高松、三笠の三殿下には、ご遺金をハンセン病事業に役立てるよう政府にご下賜になられた。政府は救済事業募金委員会を設けてこれ迄のらい予防協会を發展的に解消し、財団法人藤楓協会を設立した。

昭和二十七年に総裁として高松宮殿下をいただいた。以後貞明皇后のご誕生日である六月二十五日を中心に毎年「ハンセン病を正しく理解する週間」が行われるようになっており、昭和六十二年二月の高松宮殿下が御逝去後は、喜久子妃殿下を総裁に推戴して今日に至っている。

前述のように、ハンセン病の治癒時代の到来と、ハンセン病患者の人権回復の流れの中で、昭和二十八（一九五三）年八

月に法律第二一四号の新しいらい予防法が可決公布された。ハンセン病者の処遇改善と福祉の増進を謳ったものの、入所の強い勧告、従業禁止、使用物件の消毒廃棄、外出制限など、これまでと殆ど変化がなく、隔離第一主義を堅持するものであった。翌二十九年にらい予防法の一部改正が行なわれ、入所者の留守家族の援護が確立されることになった。

しかし、世界的にみると、各国のハンセン病に対する医療行政は大きく変化しており、特に、一九五六年（昭和三十一年）にローマで開催された「ハンセン病患者の救済と、社会復帰に関する国際会議」において①ハンセン病は伝染性がきわめて低く、治癒可能であること。②ハンセン病に対する独自の特別立法は設けるべきでないこと。③ハンセン病患者を特殊な施設に入れて、治療を行なうのではなく、在宅のまま行なうことなどの決議が行なわれた。これは新しいらい予防法を施行したばかりの我が国の関係者に、強烈な動揺を与えた。

昭和三十年代は、療養所入所者中から軽快治癒して、社会復帰する者が増加し、昭和五十五年までに約三五〇〇名に達した。その促進の一端として、藤楓協会は昭和三十七年に、東北新生園に隣接する原野一万坪を購入して東北農場を開き、東北新生園で療養中の有志者にその経営をまかせた。

同年には、仙台で第三十六回日本らい学会が開かれたが、野家美夫衛生課長らは「宮城県のらい」と題して発表し、県内患者総数一三九名、うち全国の療養所に入所者一二四名、

表4 東北新生園における収容定床

昭和	21	26	28	29	40	44	45	50
定床	600	660	670	770	670	550	520	481
入所者	568	566	576	597	554	513	501	473
県	119	107	99	103	101	93	93	87

の変遷と入所宮城県人数

※各年とも12月末日現在。

55	59	60	61	62	63	平成元	2
452	415	413	402	392	382	365	343
442	398	382	378	361	343	336	323
82	80	79	77	75	72	71	70

在宅一五名で有病率は全国一、〇三に対し〇、七三であることを明らかにした。近年における宮城県内のハンセン病患者数を示したのが表5（参照）である。

昭和四十年四月に関係者の多大な努力によって、全国的な組織である藤楓協会とは別個に、宮城県らしい予防協会が設立され、県のハンセン病予防行政に協力するとともに、軽快治癒に対する社会復帰の相談指導や、社会への啓発運動等に当る事となった。会長は松川金七、事務局長は高沢健であった。

昭和五十九年六月に藤楓協会総裁高松宮殿下が妃殿下とともに在園者の激励会に東北新生園を御訪問の折、長年に亘る地道なハンセン病事業活動の功により、協会へ（野家美夫会長）と故高沢健は高松宮殿下から表彰を受けるといふ光栄に浴した。昭和六十年六月に協会は、偏見にみちたらしいの字を廃し、ハンセン病協会（県保健環境部公衆衛生課内）と名称を変更すると共に、藤楓協会支部として加入した。

宮城県のハンセン病を語る時、東北大学医学部皮膚科学教室の別館を忘れることは出来ない。昭和初期より、ハンセン病に対して多大の学問的意欲をもっていた太田正雄教授は、皮膚科外来に当時の医科系大学としては、特記すべきハンセン病専門の診療棟を、仙台市北四番丁（現青葉区星稜町）に開設した。ここで専門に外来を取り扱うとともに、ハンセン病の基礎的、臨床的研究を行なった。

昭和十六年に、東北大学に結核とハンセン病の予防と治療

表5 近年における宮城県のハンセン病患者数

昭和	総数	在宅	松丘	東北	栗生	多磨	長島	身延
50	148	14	30	87	7	4	5	1
54	143	14	27	82	8	7	4	1
60	112	2	22	79	2	3	4	
63	107	2	21	72	5	4	3	
平成元	101	2	18	71	2	6	2	

松丘～身延 これら療養所に入所中の県出身者数。

を行なう、抗酸菌研究所が新設されて、らい部門(佐藤三郎教授)が發足すると、その運営はらい部門に委託され(皮膚科は伊藤実教授)、昭和四十七年十二月の閉鎖まで東北は勿論、北海道や関東の在宅患者にとつては貴重な治療の場となつていた。

現在、ハンセン病は、ダブソン、リファンピシン、クロファジミン(ランブレン)の二剤か三剤を、短期間規則的に内服することにより、殆どの症例が六ヶ月(長くて二年)で症状軽快し、ハンセン菌も体内から消滅して、完全に治癒する時代となつており、たとえ、新患が検出されても、その大半は療養所に入所させずに、在宅のまま夫婦生活、家業、学業を継続させながら、治療するようになってゐる。

主要文献

- ①朝日新聞：昭和經濟50年(3)、昭和50年1月28日朝刊。
②松丘保養園：創立五十周年記念史Ⅱ昭和34年。同六十年周年記念史Ⅱ昭和44年。③真山旭：国立療養所東北新生園の皇太后宮お歌碑：公衆衛生情報みやぎⅡ17号20P。昭和61年。東北新生園創立五十周年記念誌に再掲。平成元年。④真山旭：国立療養所東北新生園の開設と位置(敷地)決定の事情。新生40巻2号、昭和63年。⑤中村潤三：国立療養所史余いん(2)、

医療の広場16巻3号、昭和51年。⑥野家美夫・一の渡義之・高沢健・鎌田慶吉・上川豊・松田さた：宮城県のらい、レブラ31巻Ⅱ昭和37年。⑦野家美夫編：健ちゃんの思い出Ⅱ宮城県ハンセン病予防協会(仙台)、昭和60年。⑧野家美夫編：宮城の公衆衛生を語る「戦前編」Ⅱ宮城県衛生協会(仙台)、昭和51年。⑨太田正雄・浅海脩藏・土田哲太郎Ⅱ宮城県下に於けるらいの疫学的研究、レブラ4巻。昭和8年。⑩聖城稔編Ⅱ財団法人藤楓協会創立三十周年誌、藤楓協会(東京)昭和58年。⑪鈴木立春Ⅱらい史、宮城県史18巻、県史発行会(仙台)昭和34年。⑫高島重孝編Ⅱ国立らい療養所史(らい編)、厚生問題研究会(東京)昭和50年。⑬東北新生園年報Ⅱ昭和14～41年の各年。創立20年誌、昭和34年。同30周年記念誌、昭和44年。同40周年記念誌、昭和54年。創立50周年記念誌、平成元年。⑭上原信雄編Ⅱ沖繩救らい史、沖繩らい予防協会(那覇)昭和39年。

※なお、レブラ1巻(昭和5年)～10巻(昭和14年)の
雑報欄も参照。



介護員研修会に参加して

看護助手 守屋 恵子

平成二年度第八回目の国立療養所介護員研修会が、十二月三日から六日までの四日間、岡山県勤労者いこいの村を宿泊所にして開催されました。

厚生省保健医療局国立療養所課の主催で、長島愛生園を会場に、各療養所から二名づつが出席して研修させていただきました。研修のねらいは、高齢化と不自由度の進んだ患者さんを対象とする業務の中で、生活介護の本質を維持しながら、我々介護員がしなければならぬことは何か……。

不安と期待が交錯し、矢張り不安が大きい第一日目を迎えました。開講式に先立って池田自治会長さんから、この研修会に当たってのメッセージをいただきました。

まず始めに、看護副部長さんから、研修会中の個人の衛生管理等の注意がありました。どの講師先生も素晴らしい講義でしたが、なかでもケースワーカーの小谷先生の物語りを引用されての講義は、高齢化と不自由度の進んだ患者さんを介護する私達にとっては、迎もわかり易く胸にひびくものがありました。

「人間は外から見たら同じ人、同じ事でも心はいつときも

同じ人間はいない。人間のいの中には心がある。生きている限りいかなる状態になっても、心あるものとして援助してほしいと願っている。その心が分かるのは援助する人にも心があるからです。そして、また話の内容を聞くだけではなく、心を聴く、感情の世界を聴かなければならないのだと……。間口は狭いが奥行きはひじょうに広いものであると、改めて思いました。

不自由者棟での実習では、介護を見る、聞く、そして考える胸に、白衣に着替えました。長島愛生園の不自由者棟の介護業務に携わり、実習場面で見たこと、聞いたこと、感じたこと等から介護とは何か？を考え、また生活時間に合せた業務と、個別的な業務をどのように調整するとういかを考えてみる。をねらいとして……。

園の中に入ってみて、流石に長島愛生園は広いと感じました。会う人、会う人みんなが自転車かオートバイに乗っているといつてもいい程でした。先ず、全員で自治会に挨拶に行き、それから各実習センターへと分れました。私は第二不自由者棟（夫婦療）でした。平均年齢が七五・二歳で、やはり

入室している方がだいぶおられるようでした。

「新生園はいま頃は寒いでしょうね」

「雪は何回降りましたか」

気を遣って話しかけて下さるので、私も迎も気持ちを楽しみに実習することが出来、一日の実習が短かく感じられました。

さて、不自由者棟の実習をふり返ってみますと、気候風土、そして建物の条件の違うなかでの業務、各園各様になるもの多いと思いますが、今までの歴史に培われたものを大切に、そして私達もそれを認めながら、自分でもよく反芻しながらいろいろな事に努力してみたいものと思います。自分を見詰めるよい機会ではなかったかと思えます。

最後の日は、長島愛生園の施設見学でした。ピラカンサスが寮のいたる所で、見事な実をつけていました。新生園だったら柿の木があるように、道端に、傍の畑とおおいしそうな

介護員研修会に出席して

看護助手 佐藤 節子

岡山県の長島愛生園に於いての、第八回国立ハンセン病療

養所の介護員研修会に参加のため、十二月二日から七日までの出張でした。凡てに自信がなく不安だらけで出発しました。

同伴の守屋さんと共に、新幹線を乗り継ぎ六時間余りかかっ

密柑が、枝も折れそうな程たくさんの実をつけていて、改めて長島は矢張り暖かい所だと思いました。十二月というのに恵の鐘に登って行く時は、汗ばむ程の暖かさでした。コスモス、薔薇、椿、山茶花そして菊の花が一斉に咲き誇っていて、各寮の庭や道端を飾っていました。

湾の向うには「二十四の瞳」で有名な小豆島が、すぐ近くに見え彼の子供たちを思い浮かべることが出来ました。そして、瀬戸の海からの美しい日の出は、私達研修生の心を充分なごませて下さいました。

最後に、この第八回介護員研修会に参加の機会を与えて下さった方々、また、温かく迎えて下さった愛生園の自治会の方々や職員の皆さま、将又、いろいろとお世話していただいた皆様、誠に有難うございました。尚、協力して下さいました職場の皆様に感謝申し上げます。

て岡山駅に到着しました。

岡山駅には、長島愛生園の庶務班長の馬場さん、副看護部長の村上さんの出迎えを受け、他の療養所の仲間たちとバスに乗り、ノン・ストップにて一時間かかり、研修会場の「岡

山勤労者いこいの村」に着きました。

翌三日は、開講式があり、各講師先生方の紹介後、全国十三施設から集まった我々介護員の紹介とつづき、各先生方の講義となりました。

今回の研修の目的は、不自由度の上に高齢化が進んだ患者さんを対象とする業務の中で、生活介護に対するニーズが、多様化した現状にあつて、介護の基本を維持しながら、介護員がしなければならぬことは何か？を、直接患者ケアに参加しながら、その手掛りを見出すこと。次に老人との対話というテーマで、ケースワーカーの小谷先生の講義は、「人間の命には心がある。生きていく限り、如何なる状態になつても、心あるものとして援助して欲しいと願っている。その心がわかる人は援助する人にも感じる心があるから……」とのことでした。このお話は、患者さんとの信頼関係、もしくは心からの介護を望んでいるものと感じました。

二日目は音楽療法「歌体操」といって、始めに歌をうたい、それに合せながら体にリズムをつけて、手足を動かす体操で、肉体的にもリハビリにもなり、ストレス解消にもなると思いました。

三日目は、介護を見る。聞く。そして考えるということ、此処いこいの村からバスに乗り、昭和六十三年五月九日に開通されたという大橋を渡り、長島愛生園に着きました。多くの職員の皆さんの出迎えを受け、先づ実習に入る前に入園者自治会に挨拶をし、そして各グループに別れて実習に入りま

した。私達は第一不自由者棟でした。さぎ・つる・山鳥・きじ・隼などの舎名で、各舎とも八名づつで定床四十名とか。平均年齢が七一・九七歳だそうです。私たちの園での業務内容とまるで異なり、驚き、悩みながらも時間に押されて、見聞きすることさえできず残念でした。

最終日には、これまで研修したことのグループ討議が行なわれました。婦長さんや看護婦さん方の助言をいただき乍ら、それぞれ活発な意見の交換。その中で痴呆症の問題、或いは、よりよい介護とコミュニケーション等々。これらはみな患者さん一人びとりに対する思いやりが大切であり、若しくは介護員の意識のもちかたにあると思います。

それが終つて、施設を一時間ばかり見学させてもらいました。四方を海に囲まれ、空気が澄んで爽やか、騒音もなく自然に恵まれた環境の中での生活をエンジョイして欲しいと希わずにはおられません。殊に各寮舎の周辺には色々のバラや山茶花が咲き競い、南国らしく密柑も沢山成っていました。そして研修に携つて下さった各講師の先生、愛生園のスタッフの皆様感謝申し上げます。

この研修会で得たことを軸として、心の援助に人間性を理解した上で、ころをもつて節のある、そして患者さんに満足して頂たく介護が出来ることを願って止みません。最後に、いろいろご協力下さいました職場の皆さん、誠に有難うございました。

一九九〇年 駄想

和田修光

昨年は、さわやかな礼宮さま、紀子さまがキャンパスで出合われて五年。ごく普通の若者らしい、ごく普通の恋をしてご結婚。

また、小兵の大横綱千代の富士が、史上初の通算一千勝を達成し、ゲンのいい九州場所では大鵬親方の持つ最多優勝記録にあと一つと、通算かち星の上でも記録を更新中である。さらには、広い世界の大きな政治の流れの中で、波に乗りきれず厳しい批判を受けるなど、その間、明暗さまざまのニュースで、一九九〇年を終りを告げた。

来る年は、弱者に対して「おもいやり」の心を、次代にうけ継がれるような、温かい話題の多い年になればと思い、明日を担う健康的な若い人々につらなる愚想を……。

いつの時代も、どの国でも、若い人々が健全に成長することをねがうのは、年長者の努めです。心にゆとりのない日々の生活のなかでは、自分のことだけで精一杯となり、忙しい忙しいで、忙が忙でしまし、若い人に対しては隣人に対しても、物に対しても顧愛の心が疎かになりがちです。

豊かな日本の豊かな時代の若者が、その当時の貧困時代を生き抜いてきた若者と異なった育ち方、生き方を示すのは当

然です。従って年長者は、貧困時代の常識にさらなる磨きをかけて、豊かな時代の年長者意識をもたないと、若者との思考ギャップは益々大きくなるようです。

「今時の若い者は」と言うような意識を持つようになったら、その人は不勉強であり、リーダーとしては、可成りの欠陥があると思います。昔も今も若い人には、限らない広大な可能性を秘めて、大いなる魅力があります。そしてその若い人から学ぶものが多いことも決して昔と変わらないようであります。国籍や宗教を越え、健全な若者が示してくれる純な好意と友情には涙が出る程、心の底から感動してしまいます。これは、もしかしたら老〇現〇なのでしょうか。

年長者は顕然として若い人々を育成し、社会を教化してゆかないと消化文化を「豊かさ」と読み誤まる社会を築きつつあります。

そして今、地球環境の破壊、生命倫理の問題など、近代の科学技術の発展がもたらした自然と人間の関係破壊を修正すべき動きが、地球規模で始っています。自然と人間が相互依存して、調和のある社会を創造し、地球化時代へと移行するなかで、一人一人の役割を再確認し、緑り豊かな潤いのある地球を、後世代へ継承させないと、地球も人心も荒涼としてしまいます。

平成も早いもので三年目を迎え、改歳之令辰にあたり——。
専祈 万民富楽 万民多幸 諸縁吉祥。

(福祉室非常勤職員)

詩



高橋 たか子 選

◇ 入 選 ◇

食事療法

齊藤 照雄

糖が出たと言って

内科に呼ばれた

医師がカルテに目を落し

Sさんですかと言う

私はハイと言って少し近くによつた

あのー少し糖が出ました

しかしこの位なら

糖尿病ではないですが

油断しては大変な事になります

医師の厳しい言葉

眼鏡の奥でするとい目が光っていた

今のところは薬とか注射はいらないから
食事療法がいいです

どうですかやってみますかと言う

私は辛いなと思ったが

自分の体のことだからハイと答えた

早速カロリー計算して実行に移つた

今まで満腹になるまで食べていた体

馴れるに大変である

経済大 国日本

どのテレビチャンネルを回しても

グルメ料理や美味しい物を

食うシーンばかり

食事療法を強いられた今の私は

どっち向いても

難敵ばかり

もうすぐ

お正月が来ると言うのに――

◇ 佳作 I ◇ ◇

松の剪定

今日は風もなく

小春日和のよい天気

友と語りながら

ゆつくり歩いた

寮の前に来ると

Aさんが庭木の剪定している

声をかけながら私達は庭に入った

チヨキン チヨキンと

枝を切る音を聞きながら

温もる傍の石に二人は

腰を下ろした

空は抜けるような

素晴らしい碧さである

江崎深雪

梯子に上って

何か独り言をいいながら

松の枝を落している

ふわりと地に落ちる音

何度も梯子から下りたりして

剪定しているAさんの額に

汗の玉が光っている

地に落ちた小枝を踏みながら

満足そうに眺めているAさん

松葉の匂いが

ぶんぶんして清々しい

器用に整えられた

松の庭木を私達は見惚れていた

空の碧に

剪定した松の緑が映えて

一段と素晴らしい眺である

◇ 佳作 II ◇

冬枯の雄姿

斉藤照雄

木枯に衣服を

詩選評

選者 高橋 たか子

一枚残らずはぎ取られてしまつて
悲しもうとも泣こうともせず
猛吹雪の中に冬枯の雄姿
寒くないか、辛くないかと
言葉をかけたら
首を横にふつて堂々としていた

私はその時から
冬枯の雄姿と名付け
冬枯のファンになり尊敬した

闘病に苦しむ或る日
木枯しと猛吹雪の
情容赦のないムチに
歯を噛みしめて
やがて訪ずれる春をじつと待っている
冬枯の雄姿に感動をうけ
励まされた

今日も私の尊敬する冬枯の雄姿
吹雪の中で感動的なシーンを
弱い者のために見せてくれて
その冬枯の雄姿を
堂々と誇っていた

食事療法

斉藤 照雄

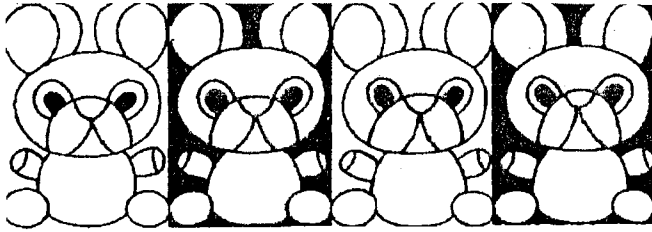
糖が出て食事療法をやるようにと、医者からいわれて、実行に移した心境を書いているのですが、大げさな身ぶりにならず、率直に正直に書いている所がよいと思えました。最後のもうすぐお正月になるのにー。という歎きも感じが出ています。

松の剪定

江崎 深雪

碧い空の下の松の剪定、自然の中に人間の労働が楽しく溶けこんでいる様子、それを眺めている喜びが詩に溢れています。





短歌

扇畑忠雄選

定義山

佐藤つや子

また夏が来るを信じてしまひ置く洗いざらしの衣類のかずかず

(入選Ⅰ)

【評】「また夏が来るを信じて」というのは切実な心理である。その気持と下の句の具体的

な事実とがよく照応している。

歩きなれ通いなれたる道にして迷うは悲し老いに入りつつ

(佳作)

定義山に手をとりくれし店の人白粉ほのかに匂いておりぬ

正門をくぐれば安らぐ思いなり定義の山に遊び帰りて

せせらぎ

新田隆志

日帰りの旅なれど体調整えんと今日は常より歩みを延ばす

(入選Ⅱ)

【評】体調をととのえるために散歩するのであろう。「日帰りの旅なれど」に作者の心の用

意がよくうかがえる。

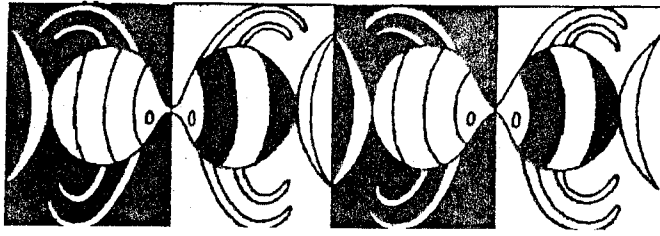
杖止めてせせらぎに耳澄ましおり時にやさしく時に激しく

(佳作)

岡山より訪ね来たりし盲友を迎え握手交わしぬ手探り合いて

業終えて出で来し庭に水犀の香に浸りおり杖により来て

ベッドの上が私の自由な場所ですと長病む友はさり気なく言う



柿の实

荒あらと小鳥の群の飛び立ちし枯野の芒揺れてかそけし

(入選Ⅲ)

小泉たき

【評】叙景の歌として秀作である。小鳥の「荒あら」と芒の「かそけし」の対照がおもしろい。

単調なひと日と思ふ庭先に洗濯ものの白く乾きて

(佳作)

つかの間の時雨過ぎつつ照りかける柿の実いくつ枝に残れり

とりたてて憶い出もなく生きて来し身に学びしはただ耐うること
車より降り立つ背なのまろみつつ九十二の母面会に来ぬ

柘の花

江崎深雪

おだやかな光りをうけて柘の白き小花の匂いつつ咲く

(入選Ⅳ)

【評】平淡な詠みぶりだが、冬咲く柘の白い花の感じが過不足なく出ている。

水霜のおきし草むらに細々と鳴く虫一つあわれに思う

(佳作)

飛びながら虫を食みつつ赤蜻蛉翅光らせて遠ざかりゆく

溝そばの一茎白く枯草の中に陽を浴びいきいきと咲く
竹籜の淡きみどりに絡みつつ紅き烏瓜風に揺れおり

サンジ草

佐々木三玉

一朝の霜に萎えたる桑の葉のつづく山間をバスのろくゆく

(入選Ⅴ)

【評】バスの行く山間の情景が上の句の桑の葉の状態よく描き出されている。

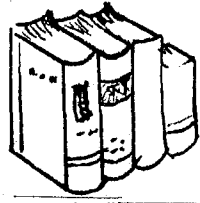
豊作の柿あちこちに残されて療園に老ゆる人多くなる

(佳作)

ペコニヤの乳色に咲く花ありて吾の好みを満たしてくれたり

建築の場と定められ豊作のカリン移植となるはかなしき

サンジ草の花ひらく頃冷えそめて重態となる友思いおり



吟行会

松崎つね

啼き出する油蟬の聲に着替えたるTシャツはわが夏のよろこび
あつらえし整理箆笥の浅ければ下着小さくたたみて入れぬ
吟行会に友を送りて佇めば心いざない啼くほととぎす
眼のうとき故に耐えつつ小春日の障子に差せる木洩日に寄る
行動半径せまく老ゆれば朝空に吾れありと呼ぶ雁帰り来ぬ

(佳作)
(佳作)

俳句 八木澤 高原 選

測量の杭が打たれて山眠る

園 永泊

(評) 何れ開拓される山裾の土地なので、既に測量の杭が打たれた。今年はそれまでにして工事は来春になることであらう。山は眠っていた。(原句では杭かたわらに…であったから、杭は未だ打たれていないのかも知れないが、大きな山に対してかたわらというのは不自然なので、打たれるとした。或は置かれてもよい。)

朝鴉の一声流る祈りの座

太田司老

(評) お祈りをしているときに、鴉が高い声で鳴いた。朝鴉だから一声が利いている。お祈りは座とあるから畳に坐った仏式の祈りなのであらう。心の澄んだ句である。

十歩ほど野道を消しし柿落葉

鈴木磐井

(評) 野の道が続いている。そのほんの十歩程のところが消えている。消しているのは柿落葉である。柿の木は屋敷内のものでなく、畑隅にでもあるのであらう。田園風景がよく出ている。

並木路に秋風の吹く今宵かな

佐藤花紅

(評) 並木の路は通い馴れた道なのであらう。今迄気がつかなかったが、その日の夕方に、秋風と思われる風が吹いたのである。いよいよ秋だなアと思う感じが湧いたことであらう。

關病のベッドより見る時雨かな

及川精一

(評) 關病生活のベッドから外を見ていると、時雨れてきたのである。健康なときに見る時雨なら、風流といつて見ることであらうが、病の身には淋しく感じたかも知れない。

辛い気持ちが続いてくるようだ。(原句では「闘病の人に厳しく冬時雨」とあったが、時雨は冬の季語だから冬はいらない。厳しくという主観は押えた方がよいので未を入れた。)

◎ 佳 作 ◎

石組の日のぬくもりに残る虫
日溜りに囁き合える朴落葉
冠雪の峰を遥かに浮寝鳥
遮断機の彼方に架かる時雨虹

太田 司 老

動かねばわれも木石赤蜻蛉
果てしなきあつきの流れ夕焼空
東天に列を正して渡る雁
足許に絡まる落葉温かく
戯れにこぎゆく落葉溜りかな
白鳥を待つ沼光り輝けり
反省をすませしあとの日記買う
秋の山静かな中に賑わえり
遠く住み故郷案ずる秋の宵

鈴木 磐 井

園 永 泊

齊 藤 照 雄

佐 藤 花 紅

水渡りのリスの林の木の葉散る
紫蘇の実や香り豊かに夕の膳

銃声やくずればはじめし霜柱

及川 精 一

川 柳 ち ば 東北子 選

◎ 入 選 ◎

衣食住たりての愚痴をこぼし合い 佐藤花紅

〔評〕 欲望。言葉を変えれば人間の明日への張りかもしれない。
衣食たりて礼節を知る……も、昔は通じた。

振り向けば若いあの日が弾んでる 齊藤照雄

〔評〕 誰にでも思い出につながる青春があり、恋も友情もそして夢が……。その若き日を、どう生かすべきか。

東西の握手に初日輝けり 桜山南仙

〔評〕 ソ連の改革の試みは東欧民主化に波及、米ソは軍縮も大きく前進、世界は平和への道標を……。新デタント。

昇進の椅子それなりの顔になる

石川蝶一

〔評〕新しい辞令の喜びは、責任という重きで机に積まれる。

歳歳年年人同じからず。泳げない者は溺れる。

裏切りを知らぬ小犬の尾の丸み

桃生 小富士

〔評〕犬には表情があり猫にはそれが無いというが、ペットが裏切るとすれば飼い主の身勝手さが……である。

◇ 佳 作 ◇

闘病よ泣くな蒼天すぐそこだ

斉藤 照雄

人生に負けたくなくて義肢を履く

落葉焚く中から焼芋コンニチワ

義理人情うすれて明治遠くなり

老骨の夢多すぎてすぐ疲れ

山田 一步

四島がリンゴの歌を待っている

人間を噛み大根ひん曲り

水圧にふつと原始の世を思い

病む涙拾ってくれた母の胸

小野寺 かつ江

夢の中タイムマシンで旅をする

白衣着の心くもらす時もある

汚物処理するも看護の愛なりき

新寮の木の香に心洗われる

及川 精一

看護助手色気混りの茶を立てる

掃除機に部屋の温みを吸いとられ
虫の声むくろになつて地に帰る

先輩へ憧れ抱く看護像

渡辺 一子

信頼の視線に応える看護帽

故郷の川を恋して鮭が来る

腹割って語る夫婦という温み

敗北の涙枕に吸いとられ

石川 蝶一

年金のテーマへ全身耳にする

養命酒一ぱい私の火を灯す

十二月情けまあるく餅になり

桃生 小富士

愛ひとつ同じ思いの夜が明ける

美しいベールに秘密覗かれる

汗きらり老も交じった足競う

佐藤 花紅

秋たわわ太り出したよ体重計

食欲の秋だ血圧症太る

ロボットがナースに代わる日が近い

桜山 南仙

一票の重みに地盤揺れ動く

ままならぬ政治に寒波まで厳し

随筆 秋山 篤選

◎ 入 選 ◎

子守り日記

鈴木 磐 井

十月三日。今日からはいよいよひとりで留守番がてら孫たちの子守りをすることになった。息子は昨日一昨日と休暇をとって会社を休み、マイコプラズマ肺炎で入院中の、小学一年の長女を見舞ったり、捕虫網やテレビで人気のあるスーパーマンの本など、さまざまなものを買求めたりしていた。これらのものを買ってあげた時には、「みんなおじいちゃんを買ってあげたんだよ」と言っ、三歳九カ月になる長男と丁度二歳になる次男に言っ、聞かせていた。それは、おじいと孫との親近感を深めさせるための気配りだった。おじいと孫たちの間とは言っ、年に二三度帰省した時に遊び相手になるだけで、家族としてのふれ合いの薄い仲なのである。息子夫婦は、入院中の長女の付き添いにいくために、長男と次男の面倒をみる手がなくなっ、ため、急拠手のすいてい

るお爺に来て貰ったわけだが、いよいよ子守りを任せ、た際にお爺が手こずり果ててお手挙げにならないようにと、みんなで過ごす時の一寸したゲーム遊びの中でさえ、肉親の情愛が幼い孫達に判るようにさせようとした気配りをして、いたし、私も又頼り甲斐のあるよいお爺ちゃんになるようと心懸けていた。

嫁は早朝に起きて大量の洗濯と、お勝手仕事に精を出し、大抵早起する八カ月の長男を歩行器に入れてお勝手で遊ばせながら、やがて夜間の付き添いを切りあげて帰宅する夫や子供に朝ご飯を食べさせ、七時半頃には夫を会社に送り出す。お爺は孫を虫捕りに誘い出す。嫁は息子と交替するため、三男を抱えて病院に行くのだが、もし出かける姿を見つければ、忽ち長男次男がかけつけて来て泣き叫びながら同乗する。そうなる前に大好きな虫捕りに誘い出すことにしたが、留守番第一日の朝は、お爺の目論見通りにうまくいった。

息子は子守を頼むに当たって、長男の孫には昆虫の話し相手をしてくれればよいと言っ。この孫は根っから虫好きで、平仮名と片仮名が読めるようになった夏の初めに、偕成社発行の安い原色昆虫図鑑を買っ、あずけたという。それからというものは、明けても暮れても図鑑を見ているようになり、今では図鑑に出ている虫を大概覚えてしまったようだという。お盆休みにきた時揚羽とりをやったが、捕った蝶の種類をよくも覚えたものだと思っ、感心した。秋になって再びこうして一緒に虫捕りをしてみて、いつの間にかお爺の方が孫に

教えられる側にまわってしまっていた。

夏の間、息子一家が近所の皆さんと一緒にラジオ体操をしたという広場へ行くと、二センチもない小さなバツタが跳ねていた。孫は早速一つ捕って何とかバツタだと教えてくれた。今はそのバツタの名を忘れてしまったが、近くを一巡りして遊び回って孫に教えたのはツマガゴロヨコバエ位のものであった。広場の中で虫籠提げばかりさせられていた次男が、今度は自分が捕るから捕虫網を貸せとねだる。長男は暫く待てといつてきかない。お爺の頼みもきかない。次男は追いかけて回っている中に大泣きになり、やがてお爺に加勢を頼んですり寄った。その辺が山で網を持ち手が交替になった。

道沿いの刈り田で水溜りを見つけると、長男がとんでいってびしゃびしゃ遊びにかかった。すると次男も負けじと計り一緒になつてびしゃびしゃを始め、膝の上まで泥んこになつた。段々熱が入り面白くなつてたまらないという声をあげる。泥んこ遊びをやつと制止した爺は、堀の流れで二足の靴を洗つて履かせ、追い立てるようにして家路についた。

玄関を開けると大きな孫がミルクを飲みたいと言つて蹠のまま上つた。お爺に掴まると自分でズボンを脱ぎ足を拭いた。小さい孫は全く言うことをきかない。お爺は力づくでねじ伏せ、嫌がつてばたばたする足から、やつとズボンを脱がせた。その間にお爺の腕に噛みつく。汚れ物を脱ぎ捨ててさっぱりした小さな孫は歓声をあげて跳んでいったが、忽ち戻つて来てお爺に絡みついた。

おやつはお母さんがちゃんと用意してくれていた。暫くすると本読みのおねだりが始まる。ひとはフアイブマンを、別の孫はアンパンマンとバイキンマンを聞きたいという。どちらかをじゃんけんして決めた。何十冊も山のように本があるので、次から次へと持ち込まれたが、孫達の方が詳しいため段段聞く方にまわり、いま人気上昇中のスーパーマンたちを私も大部覚えた。そうこうする中に昼食の支度をするために嫁が帰宅した。

それからは三男を預かる。この頃三男は飯台の回りを伝い歩きするようになり、何にでも素早く手を伸べるので目が離せない。伝い歩きが嫌になると直ぐ抱き歩きをさせると抱っこしろとせがむ。唯今一ばん手の掛かるのはこの三男だ。お爺は毛布かバスタオルで覆うてだっこし、成可く寝つかせるように仕向けて知っている限りの唄をうたう。どうしてもねんねしない場合はお母さんのおっぱいとなるが、俄か子守りにしては、うまく寝就かせたようだ。

三兄弟が一緒になる時、それは会社から長女の付き添いに直行した息子と交替して嫁が帰宅した頃は、みな一番よい子になる。テレビには、スーパーファミコン、ドラゴンボールも出ればドラエモンも登場する。人気のあるスーパーマン達が次々に活躍する時間は一時間半位あろうか、孫達はテレビに吸い込めるようにして見ている。その間に散らかっている本や玩具を片付けたり掃除機をかけるとか、拭き掃除をする時間。それが三男に愚図られると、何もやらすまいになる。

次男の孫は暫く会わない間に、好き嫌い行く行かない、いかいかやだとかと言う単語による意志表示期から「何々をしたいから何々をして頂戴」と、幼児ことばを話す時期に移っていた。と言つても単語や表情、手足を動かす仕草など大凡のことは聞き分けられるが、あれあれことばとでもいおうか、幼児ことばを形成する一段階手前のことばの発音を、お爺はすぐさま聞きとれないで困つた。それは有難いかな、長男を連れてきて聞いてもらうと、すぐ通訳してくれるから助けられた。長男にすれば二歳児の話す東北地方でいう「なたのきれない」言葉は自分が一年半前に喋つた言葉なので、大人には判らないが、自分にははつきり判る。だから直ぐ聞きわけてくれた。お爺が「〇〇をしてくれというのか」と改めて問い直すと、にこにこして「うん」という。聞いてみると常に一緒に暮らす息子でも、よくきき分けるためには、長男の知恵をかりるといふ。あと一年半経つと、次男が三男の通訳をしてくれるに違いない。

十月四日。息子の家の北側には巾広い堀があり、その堀沿いに幼児の転落防止のために金網が張つてある。垣をなしているようなその金網の外から内に向かつて、雑草の中でも一番嫌われるものである。葦から葉に至るまで棘だらけのマコノシリヌグイと、節々から根を張つて増えだすヘクソカツラが伸び張つていた。お爺は孫達を上手に遊ばせながら、可成り太くなった二色空木を覆うように繁つている雑草とりにかかった。どの雑草も枝々に潜つてしがみつき、中々取り

憎い厄介ものだった。その周りの除草をすまずと裏庭らしくなつた。そこで二色空木を剪定して木登が出来るように造り、有り合せた支柱用のビニール棹を使って小さな懸垂場を造つた。遊び場が新しく出来たので、二人の孫は奪い合つて喧嘩したりし乍ら遊んでくれた。そのために除草作業が捗つた。とは言い、短時間で済ませる作業ではなかつた。

子守りに馴れたとは言え、目の届かない所で孫達は何をしているか判らない。案の定おとなしいと思つて行つてみると、次男は外にある蛇口を捻つて水遊びに夢中になり、濡れ肌になつていた。長男は捕虫網を堀の向こうへ落としたといつてとんできた。これも可成り汚れていた。そこで一ばん世話のやける着替えである。二人共脱がせると逃げ回つて中々掴まらな

いやつが終ると虫捕りをせがまれた。蔓草のヘクソカツラを取り払つた裏庭に出て山椒の木を見ていた長男は揚羽の幼虫を見つけた。まもなく次男は楓殻の幼木についている、種類の違う揚羽の幼虫を見付け、二人で行つたり来たりして観察している。山椒についている幼虫には青い葉がいくらも残つていないため二人は餌の心配をしていた。幼虫たちは木を降りて何処へ行くものか、追跡観察することにしたようだ。

実はまだ掃除機をかけないで孫達と遊んでいる中にお昼となり嫁が帰宅した。入院中の長女は、明日以後いつでも退院してよいというお許しがでたことを聞かせてくれた。午後からは真弓の木を剪定し、木登りを楽しめるように造つた。

十月五日。前日同様嫁が付き添いに掛ける前、孫達を虫捕りに連れ出す。今朝は道端の野の草のお話を聞かせて歩く。蚊帳を知らない孫にはカヤツリ草を説明しても中々判らない。ネコジャラカシはもう一斉に穂が垂れ、こんにちわと私達にお辞儀しているようにみえる。長男は草の名をすぐ覚えて。次男には「今日わの草」と教えた。二人はその先の垣に這い登っている雀瓜まきうりを見て喜んだ。

お昼すぎ、待ちに待った長女が一週間ぶりで退院してきた。弟達はすぐお姉ちゃんを揚羽の幼虫見せに連れていった。幼虫観察には、お爺に抱かれた三男も参加して大機嫌である。家族揃って団欒した後、長女の希望でラッキー（犬）を連れ、お爺を先頭にして虫捕りを兼ねて散歩に出た。それが遂歩き過ぎて病後の長女にこたえ、その夜少し発熱してしまった。長女は気分がよいからと言って休もうとしなかったが、お爺にすすめられて床に就き、お爺の読む本を聞いたり子守歌を聞いたりしている中に快く眠った。

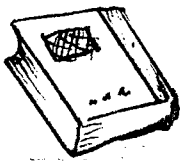
十月六日。土曜日なので息子が休みなため大事をとって、長女を診察に連れて行くことにした。息子は早朝受診の順番をとりに行く、診察を受けた上で自宅で安静をとることになつてほつとしたが、その晩に長男が九度以上の熱を出した。実はお爺は、翌日帰る予定だったが、もう暫く孫達の様子をみた上で予定をのばすことにした。

次男はまだ粗相をする。ミルクの飲み残しをまけたり零したりすることも又、屢で、何かにつけて後始末に手が掛る。

長男は弟を連れてよく水溜まりをみつめて遊ぶ。お爺は大きくなった二人を一寸の間見守っただけで、これでは逆も回りを奇麗にする裕りなどないものだと思つた。まして手の掛る三男をみては、家の中も雑巾がけがやつとという暮したと思つた。そこで息子夫婦の暮しを手伝うつもりで気付いた掃除など家事の一部をひまつぶしにしてみた。それが嬉しかつたとみえて、後日嫁が「娘の入院と義父」と題して感想文を書き某新聞の編集局に送つたようだ。それが運よく全国版に載り、知人からも、よいことを書いたといわれ、うれしい電話を頂いていると、息子が知らせてくれた。

◇ 選 評 ◇ 選 者 秋 山 篤

幸福は平凡な日常生活のなかにあることを、現代人は忘れたがる。肉親の温かい結びつき、家族の本質をとらえて、この作品は生きるよろこびを教えてくれている。作者の好々爺振りが微笑ましい。



詩



高橋 たか子 選

◆ 入 選 ◆
集 金

山 田 一 歩

年に一度の集金日が
今年もあつと言う間にやって来た
文協 四十年の歴史の流れを
早口でしゃべるように
師走の風はビュービューなる

この歴史の中で
わたしも障害を受け
手指は完全麻痺してしまつた
その今は
集金の仕事も重労働となつてしまつた

しかしながら

会費をもらう人の大半は盲人である
集金の声をかけ部屋に入ると
しばらくして手探りで
札入の財布を持つてくる
次に硬貨入れの缶
その缶の蓋は
なかなか開けられない
猫がじゃれるような仕種で
もらい終ると

相手の手のひらに財布をのせ
軽く二三度たたきながら渡す
缶は缶のあたまを二三度たたき
位置を知らせて渡す
この繰り返し次々と待っている

だがこんな苦勞は

光を失った人達の事を思う時

語るに足りない

極度な障害と麻痺したからだ
で手探りで生きねばならぬ人達が
たくさんいるからだ

その艱難困苦を思う時

自分はまだまだ俸せすぎる

そんな思いが重苦しく

骨身にしみとおってくる

夕食後も集金は続いている

新たな

励しの言葉を探しながら――。

◇ 佳 作 ◇

人生行路

山田五郎

白杖の先の金具が

カラ カラ音を立て

行くあての無い

俺の心に突き刺さる

視力を無くして十二年

弱者 年がらか

互いの言葉の行き違いで

傷つけ労りの気持さえ忘れ

つまじく

三百六十五日

ピタッと呼吸を併せて

歩み続けることの難しさに

惑う

慣れた道なのに

何処で迷ったのか

迷い道

立往生

ホーラ 又迷ったでしょう

と 妻のこえ

ヨイシヨ ヨイシヨもとの道

躓き 転びながらも

老夫婦

懸命に生きる人生なら

きつと悔いも残るまい

何時の日か辿り着く終着駅で

お互いの健闘を

賛え合いたいものだ

水 仙 作

江崎 深雪

或る日 突然
遠く離れている友から

水仙を貰った

あんたは花が好きだから持って来た
これは私が温床で咲かせた初咲きと
微笑みながら私の手に……

みどりの葉 白い一重の花びら

黄の芯

貼り替えた障子の

そばに活けると

美しきは格別である

老いた私の部屋を

うるおしてくれる水仙

白くりんとして

気品のある水仙

スチームも止り

灯りを消せば

何とも言えないよい香りが

部屋を包み

老いの心を和ましてくれる水仙

清々しいどこか変った趣がある

水仙を作って下さった友人に感謝

詩 選 評

選者 高橋 たか子

集 金

山田 一歩

年に一度ながら、あつという間にやってくる文協の集金日。その四十年の歴史を思い返してみると、自分の手指も麻痺してしまっていた、と作者は感慨深く思う。

会費を出す人の大半は盲人であり、そのやりとりを具体的に描写しているのが、真に迫っている。最後に、「励しの言葉を探し乍ら……」の一行に作者の善意が溢れ出ています。

人生行路

山田 五郎

「ホーラ……又迷ったでしょう」と声をかける妻のいる幸せ。懸命に生きる二人に、明るいつ婦の姿が偲ばれます。

水 仙

江崎 深雪

貼り替えた障子の／そばに活れれと／美しきは格別である。と水仙の背影に新しい障子を描いた、優れた美の感覚、寒気と共にあるのが／清々しい。という作者は、水仙の精神を我が精神として、生き生きと輝いています。

短 歌

扇 畑 忠 雄 選

◇ 入 選 ◇

新 田 隆 志

三十秒間隔に鳴る盲導鈴を風の間待つ杖惑いつつ

〔評〕 風の間盲導鈴の音を待つ気持が結局の「杖惑いつつ」でよく表われている。

小 泉 た き

鳴きながら日暮れの空を遠ざかるわが故里を越えて来し雁

〔評〕 夕空を啼きながら飛ぶ雁を「わが故里を越えて」と詠んだところに郷愁が感じられる。

佐 藤 つ や 子

配給の餅を数えて食いし日をまぼろしと思う雑煮を前に

〔評〕 視覚の障害を持つ作者にとって「数えて食いし日」を幻と思うのは実感であろう。

◇ 佳 作 ◇

江 崎 深 雪

あたたかき師走の山の雑林に人の声して落葉搔く音

佐 々 木 三 玉

足痛む日もよし心落ちつけて年賀状書く暖かき一日

江 崎 深 雪

貼り替えも障子明るし寒菊の黄の色冴えて匂う文机

小 泉 た き

溝深く陽かげ届かず溜りたる落葉はやがて雪に埋もれん

松 崎 つ ね

短か日はや翳り来て残りたる賀状にペンを惜しみつつ置く

佐 藤 政 己

この師走萎えし手いやに抄らず言葉選びて年賀状書く

及 川 精 一

安らかに逝くこと祈る白髪の女の部屋をつつむ春光

俳句

八木澤 高原選

◇ 入 選 ◇

人を恋う如く現れ笹子鳴く

鈴木 磐井

逝く年を全うしたる大入日

太田 司老

箎下げし人に白鳥寄りにけり

松山 清治

◇ 佳 作 ◇

教会の庭に親しく黄鶺鴒

鈴木 磐井

永病みのベッドに咲かず寒椿

斉藤 照雄

元旦の陽ざしに匂ふ青畳

及川 精一

若水に浮く一人居の鍋の煤

石川 蝶一

つむじ風起りて落葉吹かれけり

佐藤 花紅

前略も省く便りや十二月

園田 永泊

古い二人昔を語る大晦日

山田 五郎

川柳

ちば 東北子選

◇ 入 選 ◇

新年の決意達磨に目が二つ

斉藤 照雄

倅せはまだペン持てる年賀書く

桃生 小富士

手術して輸血いただき吹雪晴れ

松山 清治

◇ 佳 作 ◇

水の音から元朝の人となり

山田 一步

柏手の心に泉湧いてくる

石川 蝶一

老いてなお無言で足りる日の祈り

佐藤 花紅

初午の鞍の腹帯しめなおす

及川 精一

古里の味覚大事に今日を生き

山田 万里子

貼り替えの障子の穴を妻数え

山田 五郎

銅賞の南瓜にんまり日向ぼこ

桜山 南仙

※※※※※※※※※※※※※※※※

園内日誌

※※※※※※※※※※※※※※※※

□平成二年十月〜十二月□

- 一 日 秋田県湯沢地区結核予防婦人会連合会が慰問のため来園。
- 二 日 全患協による陳情。四日まで。
- 三 日 楓会事業部の研修旅行。(仙台農業園芸センター)
- 五 日 第六回カラオケみちのく会の発表会。於宮城会館。
- 八 日 国立らい療養所事務長研究会Ⅱ菊池恵楓園に於いて(二日間)
- 九 日 長生会野外食(於古川化女沼)
- 十一日 岩手県立一関高等看護学院生三十五名が施設見学のため来園。
- 々 日 藤楓協会茨城支部より三名が慰問のため来園。
- 十五日 新田郵便局長杯GB大会(新田総合運動場にて)
- 十六日 不自由者旅行(仙台定義山)
- 十七日 長生会バス旅行(阿武隈ライン舟下り・斉理屋敷)
- 十八日 不自由者旅行(仙台定義山)
- 十九日 バス旅行(一般者対象、盛岡)
- 二十日 新田長生大学研修旅行(松島)
- 二十一日 不自由者旅行(仙台定義山)
- 二十二日 第八回健康保険GB大会(佐沼)
- 二十六日 福寿園介護実習研修。
- 七 日 カラオケみちのく会社会見学旅行(岩井崎方面)
- 二十日 県傷軍妻の会より慰問のため三名来園。
- 二十八日 御用納め。
- 十四日 野菜品評会(三日間)
- 十六日 福寿園(特老ホーム)介護実習。
- 二十日 カラオケみちのく会多磨との交歓会(於多磨全生園)
- 二十六日 作業者慰安旅行(唐桑国民宿舎)
- 二十八日 故聖城稔氏の本葬(H2、11、9没)

▽十一月△

- 二 日 盆栽愛好会研修旅行(鹿沼)
- 三 日 文化功勞によりGB愛好会とカラオケみちのく会が迫町長より表彰(北方公民館にて)
- 三 日 楓会文化祭(菊展・盆栽・写真他五日まで)
- 五日 十日まで、中華人民共和国衛生部派遣看護職員研修のため九名来園。
- 六 日 東京都より係長外一名が慰問のため来園。
- 七日 菊香会研修旅行(南陽市)
- 八 日 第四十五回国立病院療養所総合医学会(於横浜)
- 十二日 即位正殿の儀(国民の休日)

▽十二月△

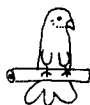
- 高 原 六部 群馬県 栗生楽泉園
- 多 磨 六部 東京都 多磨編集部

◇平成二年十月〜十二月◇

(敬称略)

謝寄贈圖書欄

始良野 二部	鹿兒島県	星塚敬愛園
甲田の裾 六部	青森市	松丘保養園
菊池野 六部	熊本県	菊池恵楓園
愛生 七部	岡山県	長島愛生園
青松 八部	香川県	大島青松園
和光 一部	鹿兒島県	奄美和光園
すむいで 三部	沖繩県	沖繩愛楽園
あだんの実	沖繩県	ハンセン病予防協会
かえで	岡山県	邑久光明園
点字愛生	岡山県	長島愛生園盲人会
遥かなれども	香川県	政石 豪
全患協ニュース	東京都	全患協本部
縮刷版 二部	東京都	朝日新聞社
天声人語	東京都	好善社
ある群像	東京都	社団法人
J L M	日本キリスト教会教職協会	
農協はさま	迫町	農業協同組合
浄土宗新聞	東京都	同上新聞社



あとがき

ことしも雪のない穏やかな冬を過ぎました。陽当りのよい土手のそちこちには、早や藜の葎が顔を出し、睦が池の白鳥たちもそろそろ遠いシベリアへの旅立つ準備の仕草かとも感じられるこの頃である。それにしても気になるのは、中東問題である。一日も早く解決して世界に平和が訪ずれることを願っている。

今年、楓会が発会して四十五周年になる。年毎に入園者（会員）の高齢化と、不自由度の進む中で、医療の問題は勿論、看護や介護の一層の充実を計ってもらいたい。

小誌のために、園長先生が退任の記念として「東北新生園小史」をお寄せ下さった。看護助手の二名からは、研修会のレポートを書いていただいた。共にご味読を乞う次第。

ご寄稿下さった多くの方々に一層のご指導を願うと共に、皆様のご自愛を祈る。

〈K 生〉

平成 3 年 3 月 10 日 印刷
平成 3 年 3 月 20 日 発行

宮城県登米郡迫町新田字上葉ノ木沢一

発行人 真山 旭
編集所 楓会文化部
印刷所 宮城刑務所

宮城県登米郡迫町新田局区内 電話0228 (38) 2121番(代)

発行所 東北新生園慰安会

東北新生園の概況

位 置	宮城県登米郡迫町新田字上葉ノ木沢1番地 (仙台市より北方へ60Kメートル)		
敷 地	352,247平方メートル		
建 物	19,717平方メートル		
建 延 面 積	20,920平方メートル		
開 園	昭和14年10月27日		
病 床 定 員	500名 (医療法定員)		
現在患者数	男190名 女133名 計323名 (平成3年2月1日現在)		
職 員 数	148名 (定員)		
園 長	医学博士 真 山 旭		

平成三年三月十日印刷
平成三年三月二十日発行

東北新生園交通案内図

(順路)

東北本線せみね駅下車
(せみね駅より約4km)
駅前で宮城交通バス
(築館行き)に乗り換え
新生園前停留所下車。
東北自動車道では、築
館IC~町内で瀬峰に
向う。ICから約8km。

